

カントにおける自然の形而上学

角 忍

(人文学部哲学研究室)

Metaphysik der Natur bei Kant

Shinobu SUMI

「自然の形而上学」という言葉は、すでに『純粹理性の批判』第一版の序文に見える。カントはそこで、批判によって新たな形而上学を打ち立てる準備が整ったので、「自然の形而上学」という題名をもつ純粹理性の体系を公けにする意向である旨を述べている。(A XXI)『自然学の形而上学的始元根拠』を公刊した後の『純粹理性の批判』第二版の序文においても、「人倫の形而上学」とあわせて「自然の形而上学」を完成させるつもりであると語っている。(B XLIII) さらに『判断力の批判』にいたっても、カントはその序文の中でなおこの計画に言及している。(V 170)「人倫の形而上学」の方は、1797年に公刊をみるにいたる。しかしこれと対をなす、「自然の形而上学」という表題をもつべき著作は、ついに世に現れることなく終わった。

「自然の形而上学」ということでカントは何を考えていたのであろうか。「自然の形而上学」と名づけられるような形而上学には、どのような問題が含まれているのか。以下、こうした点について見て行きたい。まず『純粹理性批判』の中の「超越論的方法論」の箇所によって、「自然の形而上学」というものがカントの哲学の中でどのような位置を占めているかを見てみる。次に『自然学の形而上学的始元根拠』の序文に即して、カントの構想している自然の形而上学どのようなものであるかを明かにする。最後に、こうした自然の形而上学に含まれているいくつかの問題を指摘したい。

—

カントは『純粹理性批判』の終わり、超越論的方法論において、形而上学の一般的概念を提示している。これを見ることによって、自然の形而上学というものがカントの哲学の中で占めるべき位置を知ることができる。

形而上学という一つの学の理念を明確にするということは、カントの場合、形而上学的認識の限界を規定するということを意味する。形而上学的認識は、種類と起源の点で異なる他の認識からはっきり区別され、まさしく形而上学的な認識として分離されなければならない。形而上学的認識とその他の認識との間に境界線を引くことは、二つの手順を踏む。第一に、「経験的なもの」から区別すること、第二に、数学的なものから区別することである。まず数学との区別から見てゆくことにしたい。

哲学は一般に理性による認識として捉えられる。哲学的認識とは「理性的」な認識のことである。しかしカントによれば、理性認識には二つの種類がある。一つは概念にもとづく理性認識であり、いま一つは概念の「構成」(Konstruktion)にもとづく理性認識である。ある概念を構成するとは、その概念に対応する対象をアプリアリに直観において示すことを意味する。前者、すなわち概念に

もとづくような理性的認識が「哲学的」認識といわれ、後者、すなわち概念の構成による理性認識が「数学的」認識と呼ばれる。両者のちがいは簡単にいえば、「論弁的」(diskursiv)であるか、「直観的」(intuitiv)であるかの相違である。数学と哲学とを明確に区別すべきこと、カントは「方法論」の中でこの点をとくに強調する必要があった。

哲学と数学とは、理性によるアприオリな認識であるという点では共通している。数学の方は、古来より学としての確実な進歩をとげ、驚くべき成果をあげている。この純粋数学の収めた成功は、純粋理性認識の「拡張」の輝かしい実例を示している。ところが、同じく経験に依存しない認識である形而上学とはいえば、一向に進歩が見られないのみならず、退歩、後戻りを余儀なくされている。そこで、数学的認識の方法を形而上学に取り入れるならばうまくいくのではないか、という考えが出て来る。こうした傾向をカントは、プラトン流の「狂信的イデアリスムス」と呼んでいる。これは「悟性的直観」(intellektuelle Anschauung)を認めるものであって、悟性は単に「思惟」(Denken)の能力にすぎず、直観の能力ではない、とするカントから厳しく排斥される立場である。近世哲学においては、その典型として、デカルト、スピノザの名を挙げることができる。数学を哲学と混同し、哲学を数学の方法、つまりユークリッドの「原論」にみられるような公理的方法に従って構築しようとする行き方、カントはそこに形而上学の進歩を阻害してきた要因の一つを見る。数学と哲学のちがいを、その「異種性」(Ungleichartigkeit)を強調しなければならなかったのはそのためである。

次に、形而上学が経験的なものから区別される点について見てみよう。

『純粋理性批判』第二版の序文の中でカントは次のように言っている。「理性認識の中には、理性がその対象をまったくアприオリに規定するような純粋な部分がある。数学と物理学とは、対象がアприオリに規定されるような二つの理性認識である。数学はまったく純粋であるが、物理学は部分的に純粋である。」(B X) 数学はまったく純粋である、と言われる。これはどういうことか。数学は、経験から取られるような empirisch な原理もたない、ということである。カントの考えに従うなら、empirisch な数学というようなものはない。「純粋数学」(reine Mathematik)はたしかに経験の対象に関係する。しかしそれは、純粋数学が empirisch なものに「適用」(anwenden)されただけである。こうした数学は、適用された数学、つまり「応用数学」(angewandte Mathematik)と言うべきで、経験的数学と呼ぶことはできない。

しかし哲学の場合には、数学と異なり、純粋哲学と経験哲学とに区分することができる。純粋理性にもとづくような認識、言い換えれば理性に根源をもつアприオリな原理にもとづく認識が「純粋哲学」と呼ばれ、これに対して、empirisch な原理にもとづく哲学が「経験的哲学」といわれる。この純粋哲学が広い意味での形而上学である。経験的哲学については後でふれることにしたい。

以上、形而上学は純粋理性による認識として単なる経験的認識から区別されること、また同じくアприオリな認識でありながら、単なる概念からの認識として、概念の「構成」にもとづく数学から区別されることを見た。

「純粋理性の哲学」(Philosophie der reinen Vernunft)つまり「純粋哲学」(reine Philosophie)は二つに分かれる。一つは学のための「予備学」であり、いま一つは学としての「純粋理性の体系」(System der reinen Vernunft)である。予備学は「批判」(Kritik)と呼ばれ、純粋なアприオリな認識に関する理性の能力を探求する。あとの純粋理性の体系とは、純粋理性にもとづく哲学的認識の全体を体系的連関において叙述するものであって、これが狭い意味での形而上学である。ただし、先ほど見たように、批判を含めた純粋哲学全体も形而上学ということができる。この場合、「形而上学」とは、経験的原理にもとづかず、しかも数学的ではないような純粋理性認識を意味することになる。

純粹理性の体系という狭い意味での形而上学は、理性の使用が「思弁的」(spekulativ)であるか、「実践的」(praktisch)であるかに応じて、自然の形而上学と人倫の形而上学とに分かたれる。こうして自然の形而上学の概念に辿りついたことになる。自然の形而上学は、有るところのものをアプリアリに考察する。これに対して人倫の形而上学は、有るべきものにかかわり、意志あるいは欲求能力を規定するアプリアリな原理を探求する。カントは、形而上学の名にとくにふさわしいのは形而上学野思弁的部分、つまり自然の形而上学である、と言っている。

こうしてみると、カントにおいては少なくとも三つの形而上学の概念があることが分かる。第一に、純粹理性にもとづく哲学、つまり純粹哲学という意味での形而上学、第二に、純粹理性の体系としての形而上学、第三に、この体系の中の思弁的部分、言い換えれば「純粹道徳」(reine Moral)に對置される自然の形而上学、以上の三つである。カントが単に形而上学と言うとき、大抵の場合、純粹理性の思弁的認識、自然の形而上学のことが考えられている。これは、当時の一般的用法に従ったものと見てよいであろう。

自然の形而上学とは、要するに、純粹理性による理論的認識の体系のことである。しかしカントはこの自然の形而上学についてもさらに細かい区分を行う。自然の形而上学は、まず「超越論的哲学」すなわち「有論」(Ontologie)と「純粹理性の自然学」(Physiologie der reinen Vernunft)との二つに分かたれる。超越論的哲学についてカントは、「悟性および理性そのものを、対象一般に関係するようすべての概念と原則との体系において考察し、その際、与えられるであろうような客観を想定しない」(B873)というふうにする。これに対して純粹理性の自然学は、自然、すなわち与えられた対象の総括を考察する。これは、感官を通じて与えられる自然を対象とするが、その対象が純粹理性の原理に基づいて認識されるために「理性的自然学」と呼ばれる。両者のちがいは、どこにあるのか。超越論的哲学はもっぱら主観的認識能力のみを対象とするのに対して、自然学の方は、主観とは異なる客観、つまり与えられた客観としての自然を対象としている点にある。

純粹理性の自然学はさらに、「内在的」(immanent)なもの、「超越的」(transzendent)なものとの二つに分かたれる。「内在的自然学」には、われわれの感官が外的感官と内的感官に区分されることに応じて、「理性的物理学」と「理性的心理学」の二つが数えられる。「超越的自然学」には、「理性的宇宙論」と「理性的神学」の二つが属する。

結局カントによると、自然の形而上学の体系全体は四つの主要部分からなることになる。第一に有論、第二に理性的自然学(これは、理性的物理学と理性的心理学という下位区分をもつ)、第三に理性的宇宙論、第四に理性的神学、この四つである。

しかし、カントが「自然の形而上学」という表題の下で計画していた著作の内容は、実はこの超越論的方法論で提示された自然の形而上学の体系とは一致しない。カントが完成を意図としていたのは、四つの主要部分のうち、有論と内在的自然学だけであって、超越的自然学はそこから除外される。超越論的方法論の中で超越的自然学、すなわち超越的宇宙論と超越的神学とが自然の形而上学の中に編入されているのはなぜか。その理由は、カントが形而上学ということですべての純粹理性認識を包括しているというところにある。つまりすべての純粹理性認識の中には、真の認識と見せかけの認識、言い換えれば純粹悟性にもとづく認識、すなわちカテゴリーによる認識と、狭い意味での純粹理性にもとづく認識、すなわち純粹理性概念による認識が共に含まれているのである。超越論的哲学がカントの定義によると、悟性および理性そのものを考察するものとされていたのは、このことと対応している。

カントが公にしようとしていた自然の形而上学は、「方法論」で示されている自然の形而上学のうち、超越的要素を除外したもの、つまり「内在的有論」と「内在的な理性的自然学」ということになる。内在的有論とは、純粹理性の原理のうちで、純粹悟性概念および純粹悟性の原則のみを含

むような有論のことである。さらにいうと、その著作の実質的内容をなすのは、内在的自然学の中で、外的感官の対象にかかわるもの、つまり「理性的物理学」(physica rationalis) だけである、といて差し支えない。『プロレゴメナ』以降、「いかにして純粹自然学 (reine Naturwissenschaft) は可能か」という問いが出て来るが、いま言った理性的物理学とは、その純粹自然学の中の「哲学的部分」(IV 295)、カントが「純粹物理学」(physica pura) と呼んでいるものに相当する。(B 20 Anm.) 後で触れることになるが、純粹自然学は、哲学的部分の他に数学的要素をも含んでいる。

以上かなり煩雑にわたったので、カントは哲学の体系区分をどのように考えているか、この点を整理しておきたい。

カントはかなり早い時期から、哲学の体系企画について反省を始めている。遺稿を辿ってみると、大筋においてはほとんど変更はなく、「方法論」にみられるものと大体一致している。カントの考え方は次のようなものである。まずはじめに、理性認識に数学と哲学の二つが区別される。哲学は経験的哲学と理性的哲学とに区分される。経験的哲学はまた、適用された哲学、「応用哲学」(angewandte Philosophie) とも称される。「理性的」(rational) は、『批判』の言葉でいえば、「純粹」(rein) ということである。理性的哲学あるいは純粹哲学は、さらに適用されたものと純粹なものに区分される。こうしてみると、形而上学とは純粹哲学であり、純粹哲学としての形而上学がこれまた適用された形而上学と純粹な形而上学とを含む、ということになる。この「純粹形而上学」(reine Metaphysik) は、「超越論的形而上学」あるいは「超越論的哲学」と呼ばれることもある。先に見た超越論的方法論の区分でいうと、自然の形而上学の中の「純粹理性的自然学」、「理性的自然学」が応用形而上学に当たる。そして実は、「自然の形而上学」という学が蔵する問題は、先取りすると、こうした区分の仕方そのものにあると言える。

今みたように、哲学の体系を区分する際に用いられる「純粹」という語には、二つの意味がある。一つは、empirisch に対置される rein である。いま一つは、angewandt に対置される rein である。第一の意味の「純粹」は、経験的哲学と形而上学との区別、したがって形而上学の限界規定にかかわる。第二の意味の「純粹」は、形而上学の内部における応用形而上学と、超越論的哲学すなわち有論との区別、したがって超越論的哲学の限界規定にかかわる。こうした限界の規定は、単に相異なる「部門」(Teil) の区別を示しているだけでなく、同時に、三つの部門の間の根拠づけ、基礎づけの連関を示している。自然の形而上学の体系上の問題は、まさにこの点に存する。基礎づけは「原理の適用」という形で行われる。それゆえに、その問題は「適用」(Anwendung) の問題とすることができる。そしてこの「適用の問題」は、同時に、カントの場合つねにそうであるが、「媒介」(Vermittlung) の問題をはらんでくるのである。

これまで、もっぱら哲学の枠の中だけで考察を進めてきた。しかし自然の形而上学の問題には、哲学と数学との関係も含まれている。

超越論的哲学の目的は、経験的哲学すなわち応用哲学の基礎づけにある。ちなみに、こうした Wissenschaftslehre としての機能は超越論的哲学の一つの目的ではあるが、「究極目的」ではない。究極目的はもちろん、Weisheitslehre に、つまり「知識」を通して「智慧」に至ることにある。カントが「応用哲学」ということで何を念頭に置いているかといえば、いわゆる「科学」、「物理学」である。ところで「近代科学」においては、数学は自然科学の不可欠の要素となっている。近代科学における自然認識を従来の自然学から区別する本質的特徴は、その数学的性格にある。カントの見方によれば、哲学と数学とは、全く相異なる二つの認識の仕方、種類である。したがって、学それぞれの限界を明確にして、境界を乱さない、というカントの主旨からすると、その二つの学を混同することは許されない。けれども、自然の実際の探求に当たっては、両者は互いに手を携えて行かなければならない。哲学と数学は、混淆してはならないが、物理学においては結合されねばなら

ないわけである。このことは、「超越論的原理」および「形而上学的原理」を「適用」する場面において、言い換えれば「自然哲学」の基礎づけにおいて、形而上学と数学との関係の仕方が同時に問題とならざるを得ない、ということの意味する。

カントの哲学は、ユークリッド幾何学とニュートン力学の基礎づけである、とよく言われる。しかし、形而上学と数学、および経験科学としての物理学、この三者が、具体的にどのような形で関係するかという点は、少なくとも『純粹理性の批判』を見る限り、はっきりしない。三者の関係を明確に述べているのは、『自然学の形而上学的始元根拠』という著作である。この著作を見ることによって、カントが完成を意図していた自然の形而上学がどのような内容をもつか、またそこにどのような問題が含まれているか、その点が明かになってくるであろう。

二

『自然学の形而上学的始元根拠』は、『純粹理性の批判』第二版の出る一年前、1786年に公刊されている。ニュートンの『プリンキピア』出版の百年後に当たる。カントがこの著作に『自然学の形而上学的始元根拠』という題名を与えたとき、ニュートンの『プリンキピア』が念頭にあったことに疑いの余地はない。カントはもちろん、この題名をもってニュートンに対する一つの対決姿勢を表明しているのである。『プリンキピア』の正式の題名は、『自然哲学の数学的原理』(Philosophiae naturalis principia mathematica) というものである。カントがニュートンと対立するのは、「自然哲学」もしくは「自然学」(scientia naturae)の「原理」(principia)をめぐってであるということは、そこから明かであろう。それは、自然哲学もしくは自然学の第一原理は「数学的」(mathematisch)なものか、それとも「形而上学的」(metaphysisch)なものか、という問題である。この問いはまた、自然は単に機械的(mechanisch)に見るべきなのか、それとも力動的(dynamisch)に捉えるべきなのか、というふう言い換えることができよう。

カントの自然哲学は空間、時間の「観念性」(Idealität)という批判的テーゼによって大きく変容するが、mechanischなものの根底にはdynamischなものが存するという考え方に関しては、カントは処女論文「活力測定考」以来、批判期にいたるまで終始一貫している。『自然学の形而上学的始元根拠』の中で、DynamikがMechanikに先行しなければならない、と言われるのも、そのあらわれである。自然をdynamischに捉えるとはカントにおいてどういうことを意味するか、カントのDynamikの内容はどのようなものか、この点に今は立ち入ることはできないが、カントとニュートンの対立の歴史的背景については少し触れておかなければならない。

近代科学は数学的であることを特徴としており、その描く自然像は機械論的(mechanish)である。古典力学の礎石をなす慣性法則は、「物体は外からの力が加わらぬ限り、一様な直線運動を続ける」と言う。これは、物質の状態の変化はもっぱら外的原因によるということの意味し、物質は自発性、能動的力、「生命」、そういうものをもたぬ一つの機械にすぎない、ということを含意している。この見方を全体にまで押し及ぼせば、世界全体も神を制作者とする一個の機械とみなされる。機械は動力を与えられなければ動かないが、自然という一個の機械に力を注入して運動せしめるのは、神なのである。こうした機械論的な見方を徹底した形で推し進めたのは、デカルトである。物質即延長という実体論により、自然は「幾何学化」される。これと共に、自然学の原理は、本質的に数学的なものとなる。「私は、幾何学もしくは抽象数学の原理以外にはいかなる自然学の原理も承認しないし、要請もしない。なぜならこのような方法によってこそ、一切の自然の現象に説明を与え、また確かな証明を与えることができるからである。」デカルトは『哲学の原理』のなかでこう宣言する。これは、逆にいえば、「実体的形相」のごとき、アリストテレス的、スコラ的な形而上学的

原理は排斥すべきだ、ということである。デカルトの考え方からすると、たとえば物質に内在する「力」などというものは、自然学から追放されねばならないのである。これに反発を示したのは、いうまでもなくライブニッツである。ライブニッツは近代科学における数学的自然認識を容認しながら、実体を「力」として捉えることによって、「現象」としての自然の秩序は根本において形而上学的原理によって根拠づけられるものと見た。デカルトに反対するという点では、ニュートンも同じである。ニュートンの『プリンキピア』は、デカルトの自然学、ことにその渦動宇宙論との対決を重要な課題の一つとしている。ニュートンが自然現象の説明のために持ち出した「牽引力」、「引力」は、「押す」とか「突く」、そういう物体の衝突にみられる mechanisch な作用には還元できぬたぐいのものであって、その点、ニュートンは自然の機械論的説明のもつ限界についてはっきり自覚していた、とすることができる。しかし、自然の現象は数学的法則に従属せしめられるべきであるという、ガリレイ、デカルト等の拓いた近代科学の基本路線は、もちろん踏襲する。『自然哲学の数学的原理』という表題は、こうした「新たな知」(scientia nova)としての近代自然科学の理念を表明しているのである。

ニュートンによれば、「哲学」の課題は、「運動の現象から自然の諸力を研究し、次にこれらの諸力から他の現象を説明すること」にある。この課題は、ニュートンに従えば、幾何学をその一部とするような「機械学」、つまり「力学」——ニュートンの使っている言葉では「理性的機械学」——によって解決されるべきである。従来、数学と機械学とは区別して考えられてきた。しかしニュートンは、幾何学は「線を引く」、「円を描く」という「機械学的実践」にもとづくものであり、「一般機械学つまり一般力学の中で測量術を正確に提示し、証明する一部門」に他ならないとする。このように、ニュートンにおいては、数学は力学の内に含まれる一つの部分として、「自然哲学」に編入されることになるのである。「哲学」と「数学」とが、「自然哲学の数学的原理」という形で結びつかざるを得ない理由は、以上で理解することができよう。

ではカントが『自然学の形而上学的原理』を構想した背景には、「数学と哲学」の関係についてのどのような考え方があったのか。

『自然学の形而上学的原理』という著作には、この著作全体を理解する上で重要な序文が付されている。この序文は題名の解説であるが、同時に、自然学にとって「自然学の形而上学的始元根拠」と呼ばれるような、一つの特殊な形而上学が必要とされる理由の説明になっている。この形而上学はもちろん、近代自然科学が排除に努めたような旧来のアリストテレス——スコラ流の形而上学ではなく、カント流の批判的形而上学を意味する。序文の中でカントは、自然学において数学と哲学とがそれぞれどのような役割を果たすかを明かにする。この点についてのカントの考え方をあらかじめ要約して示し、その後で説明を加えることにしたい。

1. 自然学は、まずはじめに (zuerst) 自然の形而上学を前提する。

これは、ニュートンを代表とする数学的自然科学の行き方に対して、自然学の第一原理は数学的ではなく、形而上学的もしくは超越論的なものでなければならない、という主張を含んでいる。

2. しかし「自然学」(Naturwissenschaft) は、数学が適用され得る場合にのみ、「学」(Wissenschaft) として可能である。したがって自然学が成立するためには、数学の媒介が不可欠である。これは、数学は本来、「自然の哲学」の「一つの部分 [部門]」(ein Teil) ではなく、自然学的探求の「道具」(Instrument) である、という主張を暗に含んでいる。

3. しかしながら、数学を「自然論」(Naturlehre) に適用するためには、「形而上学的原理」すなわち表題にうたわれるような「形而上学的始元根拠」(metaphysische Anfangsgründe) が必要とされる。

以下、このカントのテーゼについて説明を加えたい。序文は、先に述べたように、自然学の理念を解明することを通じて、或る特殊な自然の形而上学の必要となるゆえんを説明しようとする。

自然学の区分に関しては、「自然」(Natur)の意味の区別に応じて二つの見方が成り立ち得る。自然は、「ある物の存在に属するすべてのものの第一の内的原理」を意味する。これは、自然の「形相的」な意味である。この場合、自然は「本質」(Wesen)に對置されている。「本質」とは、「ある物の可能性に属するすべてのものの第一原理」を意味する。ある物の存在に属するものとは、その物の「可能性」にではなく「存在」に属する諸規定のことである。そういう諸規定の原理は、「法則」(Gesetz)と言い換えることができる。(R4840)したがって、自然とは「法則の下にあるすべての存在」ということになる。実際『プロレゴメナ』では、「自然とは、一般的法則に従って規定されている限りでの、物の存在」というふうに規定されている。つまり、形相的な意味での自然とは、簡単にいえば「合法則性」、「法則性」(Gesetzmäßigkeit)のことに他ならない。

ところで、「種」(Art)の上で異なる物は、それぞれに固有な内的原理をもつ。したがって、自然のこの第一の意味に従う限り、物の種類が異なるに応じて、それだけの数の自然学がありうることになる。

第二に自然は、「われわれの感官の対象でありうる限りでのすべての物の総括」を意味する。これは、自然の「質料的」な意味である。これを「可能的経験の対象の総括」と言っても、また「現象の総括」と言っても、本質的な相違はない。この意味での自然は、われわれの感官の主要な相違に応じて二つの部分を持つ。感官は外的感官と内的感官とに大別される。外的感官の対象は「物体」(Körper)であり、内的感官の対象は「魂」(Seele)である。そこで二つの「自然論」が成立しうることになる。「延長した自然」を扱う「物体論」と、「思惟する自然」を論ずる「靈魂論」である。自然論あるいは自然学は通常、その原理が「経験的」(empirisch)か「理性的」(rational)かに応じて叙事的(historisch)と理性的(rational)に区分されることがつねである。しかしカントは自分なりの「学」の理念にもとづいて、自然学は次のような仕方では区分すべきだと言う。「自然論」は、「叙事的自然論」と「自然学」とに区分される。この「自然学」はさらに、本来の意味での自然学と非本来の意味での自然学とに区分される。単なる「論」(Lehre)と「学」(Wissenschaft)との相違は、認識相互の関係の仕方の相違にある。認識が単に並列的な関係、co-ordinatioの関係にしかないとき、それはいまだ学とは言えない。学をなすような認識は、互いに根拠と帰結のあいだの従属関係、sub-ordinatioの関係に立っていなければならない。認識が相互に「根拠」(ratio)と「帰結」(rationatum)の関係にあるとき、この連関はまさしくrationalであるということができる。本来の意味での自然学と非本来の意味での自然学との区別は、原理がアプリアリであるか、それとも経験的(empirisch)であるかの相違による。

「理性的な自然論は、その根底に存する自然法則がアプリアリに認識されるものであって、単なる経験法則ではない場合にのみ、自然学の名に値する。」(IV468)

アプリアリな原理にもとづく自然認識は、「純粹」と呼ばれ、経験的な原理にもとづくものは、「適用された理性認識」と言われる。自然の説明のアプリアリな原理を含むような部分を「純粹な部分」(reiner Teil) (Vgl. IV473)と呼ぶことにすれば、カントの主張は結局次のようになる。自然学の、学としての性格は、もっぱらその純粹な部分によるものであって、自然学はこの純粹な部分によってのみ、「本来の学」たりうる。ちなみに、ここでいう「純粹な部分」は、純粹物理学(physica pura)すなわち「理性的物理学」(physica rationalis)とは必ずしも合致しない。というのは、その「純粹な部分」には数学的要素も入っているからである。以上を要約すれば、すべての本来の自然学は純粹な部分を必要とする、ということになる。

ところで、はじめに述べたように、純粋理性認識には二つの種類がある。単なる概念にもとづく純粋理性認識、すなわち形而上学と、「概念の構成」に基づく純粋理性認識、すなわち数学である。そこで、本来の自然学と、純粋理性認識たる形而上学と数学、この三者の関係を詳しく規定する必要が生じて来る。本来の自然学は、まずはじめに自然の形而上学を前提する。自然科学の基礎をなすのは、自然の法則のアプリオリな認識である。しかるに、「法則」とは、物の「存在」に属するものの原理である。「存在」はしかし、アプリオリな直観において現示することはできない。なぜなら、ある物の存在を言うためには、「純粋悟性の原則」の中の「要請」にあるように、「知覚」との関係、したがって「感覚」との関係が必要とされるからである。存在は「構成不可能」である。それゆえに、自然法則に関するアプリオリな認識は、数学にではなく、形而上学に属すべき事柄だということになる。

自然の形而上学は、アプリオリな原理を含まねばならない。この自然の形而上学は二つの部分をもつ。一つは、「超越論的部分」(transzendentaler Teil) (IV 469) である。これは、経験の何らかの一定の対象に関係せずに、「自然一般」(Natur überhaupt) の概念を可能ならしめる法則を扱う。この場合、自然は、「種」(Art) の上で異なる物の持つ自然、つまり本性という意味での自然の種別に関して全く無規定に考えられるような自然である。したがって「超越論的部分」は「自然一般の形而上学」(IV 473) と言うことが許される。「自然一般の概念を可能ならしめる法則」とは、超越論的観念論の立場からすれば、「純粋思惟の法則」であって、「純粋悟性概念」に帰着する。もう一つの部分は、「応用された部分」である。「特殊な自然」(besondere Natur) にかかわる応用部門には、二つ考えられる。内的感官の対象にかかわるものと、外的感官の対象にかかわるものである。したがって、特殊な自然の形而上学としては、「物的自然」の形而上学と「思惟的自然」の形而上学との二つが成立しうる。これらをカントは、「特殊な形而上学的自然学」(IV 470) と呼んでいる。よく引用されるカントの有名な言葉が出て来るのは、まさにこの文脈においてである。

「しかし私は、どのような特殊な自然論であれ、そこに数学が見出されるだけの数しか本来の学は見出され得ない、と主張する。」(IV 470)

その理由は、自然一般についてのアプリオリな認識には数学は必要としないが、しかし一定の自然物についてのアプリオリな認識は数学を媒介とすることによってのみ可能である、ということにある。カントの論議はこういうものである。先に見たように、本来の自然学には、自然物のアプリオリな認識にもとづくような純粋な部分を要求する。ところで、或るものをアプリオリに認識するとは、或るものをその単なる可能性から認識することである。しかし一定の自然物の可能性は、その単なる概念から認識することはできない。単なる概念から認識し得るのは、その概念が矛盾しないという思惟の可能性だけである。一定の自然物の可能性を認識するためには、その他にさらに、概念に対応するようなアプリオリな直観が与えられることが要求される。しかるに、概念に対応するような直観がアプリオリに与えられるということは、その概念が「構成」されるということであり、概念の構成による認識は数学的認識である。ゆえに、一定の自然物についてのアプリオリな認識、つまり「純粋自然論」(reine Naturlehre) は、数学を媒介としてのみ可能である。そこから、自然論というものは、数学が適用可能である場合にのみ「本来の学」を含む、という帰結が出て来る。この基準に照らしてみると、「化学」は本来の学から外される。それ以上に重要なのは、「経験的靈魂論」、つまり心理学が本来の学たり得ないとされることである。心理学は学とはなり得ず、「記述」に留まる外ない。その理由は、内的現象に数学が適用できないということにある。したがって、カントによれば、自然学は結局物的自然についてのみ成り立つことになるのである。

しかしながら、数学を特殊な自然論、今の場合でいえば、物体論に適用することが可能となるた

めには、「物質」(Materie)一般の可能性に属する諸概念、そういう諸概念の構成の原理が前置きされなければならない。したがって物質一般の概念の完全な「分析」が根底に置かれなければならない。しかし、これはもはや数学の領分ではなく、形而上学の仕事である。カントのこの主張を一般的な形で言い表すと、数学が自然学において自然の認識のための手段、オルガノンとして機能し得るのは、形而上学が数学に対して、構成さるべき概念をあらかじめ提供している場合に限られる、ということになるであろう。自然論に数学を適用し、これを学たらしめるためには、形而上学が先行しなければならないわけである。そして『自然学の形而上学的始元根拠』名づけられた著作は、実は物体的自然に関するこうした形而上学の体系を内容とするものなのである。

物体的自然の形而上学、つまり応用形而上学としての「自然学の形而上学的始元根拠」のなすべきことは、二つある。第一に、物質一般についてアприオリに思惟し得る「規定」、言い換えれば物質の形而上学的概念を体系的な形で提示することである。これは、「超越論的原理」を外感的官の対象一般に適用することによって、自然学の「形而上学的原理」、たとえば「運動」、「空間の充実」、「惰性」等の概念を展開することを意味する。第二に、それと同時に、こうした形而上学的概念、すなわち形而上学的原理の数学的構成可能性を示すことである。こうした点において、『自然学の形而上学的始元根拠』という著作は、数学的自然論、すなわち、カント流の厳密な意味での「自然学」(Natur-wissenschaft)そのものの可能性を基礎づける理論である、とすることができる。

三

「自然の形而上学」には、どのような問題が内包されているであろうか。ここでは、もっぱら体系上の問題にのみ限って見てみたい。

自然の形而上学の体系上の問題は、体系上、三つ存在する。第一に、(1)超越論的部分すなわち超越論的哲学そのものに内在する問題である。第二に、(2)超越論的原理の適用の問題である。これは、超越論的哲学から物体的自然の形而上学、つまり「自然学の形而上学的始元根拠」への「移行」(Übergang)の問題に外ならない。第三に、(3)形而上学的原理の適用の問題である。これは、自然学の形而上学的始元根拠から経験的物理学への「移行」の問題である。以下、順を追って三つの問題の所在を明かにしたい。

- (1) 自然の形而上学の「超越論的部分」(transzendentaler Teil)とは、「内在的超越論的哲学」あるいは「内在的有論」を意味する。内在的有論は、「自然一般」の形而上学として、一般に自然というようなものを可能にする法則、つまり自然の一般的法則を扱う。いかにして自然の一般的法則をアприオリに認識し得るか、この問いはカントによれば次のようにして解決されるべきである。すなわち、カテゴリーによる純粹悟性の認識、『純粹理性の批判』の中で展開された、いわゆる「純粹悟性の原則」は、可能的経験一般の原則であり、この可能的経験一般の原則は、同時に自然の一般的法則に外ならない、このような形においてである。その根本思想は、「超越論的演繹」の中で表明されている通り、自然の合法則性は、根本においては、純粹悟性概念にもとづくものであり、悟性は自然に対して法則を付与するもの、つまり自然に対する「立法」(Gesetzgebung)を行うものである、という考え方である。この場合、感官の対象一般、すなわち現象一般に対するカテゴリーの適用の可能性の問題が生じて来る。これは次の二つの部分問題に分けて考えることができる。(i)悟性の純粹概念としてのカテゴリーはいかにして「経験的」(empirisch)にのみ与えられ得る感官の対象に適用され得るか。(ii)個々のカテゴリーは具体的にいかにして現象に適用され得るか。これは、純粹悟性概念を現象に適用し得るための感性的条件はいかなるものであるか、という問いである。最初の問題は、超越論的演繹、ことに第二版の演

釋の後半部(第24節から第26節)によって解決されるべきものである。第二は、「超越論的判断力の理説」、いわゆる「図式」論に属する問題である。これらは、カントにとっては、もちろん解決済みと見なされる。悟性の純粹概念がいかにして経験的直観の対象たる現象に適用し得るか、その原則的可能性は、純粹悟性がわれわれの感性的直観の形式、ことに内感の形式としての時を規定する働きによって説明される。この働きは、感性的性格と悟性的性格とを併せ持つ、「想像力の超越論的総合」という形で行われる。カントはこの総合の働きを「感性に対する悟性の最初の適用」(B152)と呼んでいる。カテゴリーの「現象への適用」は、一面においてカテゴリーと「同種」的であると共に、他面においては現象と同種であるような、純粹な表象を求めることによって説明される。この「媒介的表象」は、いうまでもなく「時の超越論的規定」たる「超越論的図式」である。超越論的図式は本来、「想像力の超越論的総合」の産物であるから、当然、感性的であると共に悟性的であるという二面性を備えている。こうした二面的な純粹な表象である図式を媒介にして「カテゴリーの、現象への適用」が可能になる、とカントは考える。

- (2) 『自然学の形而上学的始元根拠』においては、超越論的部分で提示される超越論的原理が「外的感官の対象」に適用されることになる。この場合、外的感官の対象、すなわち「物質」は、われわれにとって与えられたものとして前提されている。そこで次のような問題が生じて来る。われわれの外的感官に与えられているような対象、したがってアポステリオリにのみ与えられる対象について、いかにしてアプリオリな認識、つまり「物体的自然の形而上学」が成り立ち得るのか。これに対してカントは次のように答える。経験から取って来られるのは、「われわれに対象を与えるために必要とされる概念」、すなわち物質の概念だけである。この物質の概念はなるほど「経験的」である。しかし、その認識のためには「経験的原理」を用いてはいない。その原理はあくまでも純粹理性のアプリオリな原理である。したがって、「自然学の形而上学的始元根拠」においては経験的概念が根底に置かれるが、物質一般の「規定」は全くアプリオリに認識されるのである。それゆえに物質についてのそうした認識はやはり「形而上学」といわなければならない。カントの答えは一見明快であるが、しかし解釈上問題があることは否定できない。物質の根本規定とされるのは、「運動」(Bewegung)の概念である。「物質とは、空間において可動的なるものである」、これが、物体的自然の形而上学の最初の「定義」である。物質の他のすべての規定は、この運動の概念を介して物質に結び付けられる。媒介概念としての運動概念は、このような媒介機能を担っているため、経験的概念であると共にアプリオリな概念であるという二面性を備えている。この二面的性格をどのように捉えたらよいか、これについては、プラース、グロイ、K. クラマー、ホッペらによってさまざまな解釈の試みが重ねられてはいるが、今日なお最終的決着をみていないといってよい。「応用形而上学」はなるほど純粹なアプリオリな認識を含んでいる。しかし、その認識は、超越論的哲学が含むべき認識のように完全に純粹であるとは言えない。そこに問題が生じて来ているわけである。これは要するに、応用形而上学が内包している経験的性格に発する問題であって、結局カントが「述語づけ得るもの」、Prädikabileと呼ぶ「派生的な純粹概念」の経験的性格をどのように捉えるかという問題に帰着すると思われる。
- (3) 自然学の形而上学的始元根拠から物理学へ移行するためには、別に何らの媒介も必要としないようにみえる。というのも、この移行は、アプリオリな形而上学的原理を単に経験に適用することしか意味していないからである。ところがまさにこの適用が、カントにとって問題をはらんでくるのである。カントによれば、自然学の形而上学的始元根拠と経験的学としての物理学とは、一つの裂け目によって遮断されている。そのため、両者の間に立って媒介の役割を果たすような中間概念が必要とされる。それは、一面において経験的であると共に、他面においてアプリオリであるような概念でなければならない。カントは、「運動力(Bewegungskraft)を持つ限りでの

物質」という概念がそうした概念である、と言う。このような考え方から、自然学は三つの部分から構成されるべきだということになる。このうちの第一の部分は自然学の形而上学的始元根拠であり、第三の部分は物理学である。第二の部分は、「物質の運動力をアプリアリな概念に従って探し求め、これを一つの体系の形で叙述する」ような部分である。カントはこれを「一般的動力学」(allgemeine Kräftelehre, dynamica generalis) と名づけている。1796年からカントの死の直前、1805年にかけて書き留められた龐大な遺稿、「オプス ポストゥムム」(Opus postumum)の主題は、今のべた問題をめぐるものである。「形而上学から物理学への移行」と題されるべき著作は、カントが「最後の著作」として計画しながら、ついに完成をみずに終わったものである。自然の形而上学が完結しなかったのは、果して原理上の困難によるものか、この問題には今立ち入ることはできない。しかし、問題の根は、「適用における媒介」という点にあること、少なくともこのことは、以上から明かであると思われる。

アプリアリなもの、純粋なものが、アポステリアリなもの、「経験的」なものの根拠をなすこと、これを示すためにカントは常に「第三のもの」による「媒介」という考え方に訴える。以上みてきただけでも、「想像力の超越論的综合」、「超越論的図式」、「運動の概念」、「運動力の概念」が媒介者となって現れた。異種的なものの統一を第三のものによる媒介によって考えるということは、カントの思惟の本質的スタイル、様式と言ってよいであろう。この考え方がどこまで通用するか、これを明かにすることは今後の課題に属する。

(平成元年10月5日受理)

(平成元年12月27日発行)

